

歌舞伎の世界における関羽の受容

梁 蘊 嫻

関羽は三国時代の蜀の武将であり、正史『三国志』では、関羽について語られる部分は決して多くないが、『三国志演義』では個性の強い中心人物の一人である。歌舞伎の世界では、二代目市川團十郎がしばしば関羽の役を演じ、江戸時代の庶民の間でも広く知られていたと思われる。本論文は、歌舞伎の世界における関羽像についての一考察である。

一、『三国志演義』における関羽

はじめに、原典である『三国志演義』では関羽がどのように描かれているかを見ておく必要がある。すでに多くの先行研究¹⁾によって指摘されているが、『三国志演義』における関羽像の特徴は、おおまかに以下の四点にまとめられる。

1) 「義」に厚い

『三国志演義』第一回は、劉備、関羽、張飛の三人が「義」

を結ぶという場面があるが、三人の主従関係が「義」という徳目によって確立されていることを明示している。この「義」という概念は、『三国志演義』において、主要なテーマとして一貫して取り上げられているもので、そのなかで、もっとも「義」に厚い人物として描かれているのが関羽なのである。第二十五回〜第二十八回は、関羽が一時的に曹操へ投降し、そして再び劉備のもとへ帰るといふ場面であり、ここで強調されるのは、劉備に対する関羽の誠意である。第二十五回では、関羽は曹操の軍隊に包囲され、曹操側の張遼が関羽に投降を打診してくる。関羽は三つの条件を提示したうえで降伏する。曹操の下に滞在する関羽は、曹操から美しい服を賜うなど優遇されても、劉備のことを忘れることがない。「もし劉備がすでに亡くなっているなら、どこに帰するか」(拙訳、以下同)²⁾と聞かれた関羽は、「あの世までついていく³⁾」と答える。曹操はそれを聞いて、関羽が「義」に厚いことを賞賛す

るのである。

関羽が曹操に投降したという史実は正史『三国志』には載っているが、『三国志演義』作者、羅貫中はその史実を物語に取り入れたうえで、「同年同月同日に死ぬ」という桃園の誓いを引き合いに出すことで関羽の投降を美化して、「義」に厚い関羽像を描くことに成功しているのである。

2) 武勇

数多くの武将の中で、もっとも勇ましく描かれているのは関羽だといえよう。陳昭昭氏によると、『三国志演義』で関羽が討ち取った武将のうち、名前が知られている者は二十人強にのぼるが、その後の戯曲、小説では、関羽によって殺された武将の人数はこれほどではないという。諸書を見渡すと、関羽が顔良、龐徳を殺したことは歴史書にも言及されており、車胄、文醜、蔡陽を切り殺したという逸話は、元代の戯曲および『三国志平話』に見受けられる。その他の事件はすべて『三国志演義』の創作だと思われる。関羽を勇猛で無敵な英雄として位置づけようとする羅貫中の意図が窺われよう。そのことは、関羽の超人的な活躍の描写に如実に表われている。その特徴の一つは、相手をしとめる際の「素早さ」である。たとえば第五回、華雄を討ち取った場面は関羽の超人的な能力が強調されている。関羽はこの時点では、袁紹陣営に属す

る無名の兵士にすぎないが、敵方の猛将である華雄と戦いたいと志願する。そして、「もし、勝たなかつたら、某の頭を斬ってくれ」と自信をのぞかせる。

曹操が熱い酒を一盃持つてこさせて、戦いにいく関羽に飲ませようとする。関羽がいうには、「酒はとりあえず置いておけ。某はすぐいつてくる。」陣幕を出て刀を携え、飛ぶほどの早さで馬に乗って出かけると、鼓声も叫ぶ声も大きく、天地は揺れ、山岳は崩れるがごとくで、皆驚くばかりだった。諸侯たちが様子を見に行くと、関羽は華雄の首を引つ提げて、地面に投げつけた。その酒はまだ温かった⁶。

その後、顔良(第二十五回)を殺す場面では、顔良が身構える前に関羽に切り落とされた。その後の、文醜(第二十六回)、蔡陽(第二十八回)に関わるエピソードでも、関羽の武勇は殊更に強調される。また、第二十七回の、関羽が破竹の勢いで五つの関所を破っていくのも有名な場面であり、日本では、『関羽五関破』『諸葛孔明鼎軍談』『通俗三国志』などの『三国志もの』もこの場面を取り入れている。

3) 怨霊顕現

関羽は孫権によって殺害されてしまうが、第七十七回では、その怨霊が玉泉山でさまよって、「頭を返せ」と叫ぶ。その際は、僧侶である普静に諭されて、帰依して去るのだが、その後、孫権が三軍に褒美を出すとき、関羽は武將の一人呂蒙のりうつり、「われ、すなわち漢寿亭侯関雲長なり」と叫びながら、孫権を掴んで罵る。そして、言い終るやいなや、呂蒙は倒れて死んでしまう。このように、関羽が怨霊としてこの世に出現するという場面は複数ある。関羽の怨霊出現という物語は、民間に広く行われていた「関帝信仰」に基づくものである。関羽は仏教・道教などで神として祀られている。当然ながら、宗派によって、関羽の位置づけも異なり、たとえば、仏教では、関羽は仏教の守護神として見なされているが、道教では、より高い地位の神として崇められている。¹⁰

4) 驕る性格

ただ、関羽は倫理的に完璧な人物として描かれているというわけでもなく、傲慢と捉えられるところも多い。黄忠が自分と並んで「五虎将軍」の一人に数えられたと知った関羽は、「あんな老いばれと一緒には恥ずかしい」と言っており、その「五虎将軍」の名を拝受しようとしなない(第七十三回)。「三国志演義」は史実にも基づいて、こうした驕りたかぶる性格も持ち合わせている関羽像を描いているにもかかわら

ず、「義」に厚く、勇猛という肯定的な面の前では、このような欠点があまり問題にされないのである。

以上の四点は『三国志演義』における関羽のイメージであった。このような関羽像がどのように江戸時代の歌舞伎に受容されたのかを見てみたい。

二、歌舞伎における関羽

1) 荒事

歌舞伎の世界で、関羽が初めて登場したのは、元文二年(一七三七)二代目市川団十郎が出演した江戸川原崎座の『閏月仁景清』である。これは、平安時代から鎌倉時代初期にかけての武將である景清を主人公とする、いわゆる「景清物」の一つである。『平家物語』、『源平盛衰記』、能、浄瑠璃、歌舞伎といった文芸の方では景清を主人公に据えた作品が数多くある。二代目団十郎は、中国の武將である関羽と張飛を、景清と結びつけたのである。これによって、『閏月仁景清』はそれまでの「景清物」と比べて、独特な作品となった。本論では、景清と関羽を関連付けた意義、そして、景清劇で演出される関羽のイメージについて論じたい。¹¹

『閏月仁景清』以前に成立していた主要な「景清物」は以下の五つである。

①『平家物語』においては、三保谷（屋）十郎との鍛引以外は、景清のことは全くまともった話柄としては扱われていない。

② 謡曲『景清』

景清の娘丸は、父が流された日向国宮崎へ従者を伴って赴く。盲目となった景清は娘と親子の対面が叶い、三穂谷十郎との鍛引のさまを勇ましく語り、臨終が近いということ、死後の回向を娘に頼んで別れる。

③ 幸若『景清』（室町時代）

物乞いに変装して頼朝を狙う景清は、重忠に見破られて暗殺に失敗する。所在を妻に密告された景清は、匿ってくれた大宮司を助けるため、出頭する。世間から笑いものにされることに堪えられず、いったん、牢破りをするが、大宮司に危険が及ぶのを恐れて再び牢に戻ってくる。斬首される景清のために、観音が身代りに立ったため、頼朝は景清を釈放するが、景清の両眼をくりぬいてしまふ。景清は宮崎へ下向する途中、再度靈験を得て、両眼は元通りになる。

④ 近松門左衛門『出世景清』（貞享二年、一六八五年）

頼朝をねらうために、景清は人足に身をやつして、頼朝がいる東大寺大仏殿に入り込むが、重忠に見咎められて失敗する。景清は南都から京に逃れるが、かねて景清と

馴染んでいた元遊女阿古屋は、景清が別の女小野姫と親しいことに嫉妬して、彼を訴人にする。景清の行方を白状させるために小野姫は拷問されてしまい、このため、景清は出頭する。その後、景清は牢を破り、阿古屋の兄を殺して、再び牢に戻る。景清は処刑されるが、首を討つたはずの景清がまだ獄中で生きている。景清の首は実は観音の首であった。景清は罪を許され、日向の宮崎を拝領する。突然、景清は頼朝に切りかかるが、自ら両眼をえぐって、日向に下っていく。

⑤ 文耕堂・長谷川千四合作『壇浦兜軍記』（享保十七年、一七三二年）

景清は頼朝を討とうとするが、不首尾に終わる。おじの大日坊は景清を殺すように頼まれるが、逆に景清から返り討ちにされる。源氏は景清の行方を追及し、愛人の阿古屋を拷問にかける。重忠が阿古屋に琴・三味線・胡弓を弾かせてみると、音色が少しも乱れぬことから、景清の行方を本当に知らないと思めて釈放する。最後に、頼朝は清水観音の夢のお告げにしたがって景清の命を助ける。

それぞれの物語は内容や趣向が異なっているが、基本的に平家の残党景清が、敵である源頼朝の命をねらうことを物語の

中心に据えており、また、牢破りや観音の靈験といった題材が共通している。

歌舞伎の方でも元禄十五年（一七〇二）にすでに「景清物」が上演されていた。山中平九郎は元禄十五年正月市村座上演『実悪七兵衛景清』で景清を演じている。『役者二挺三味線』（元禄一五年三月刊）の山中平九郎の評とあこや役の岩井左源太の評によると、あこやが死に際に、八月になった胎内のわが子の顔を一目見たいと望むため、景清があこやの腹を断ち割って胎児を取り出すという一場面があったという。さらに、『泰平出世景清』（『出世景清白梅の旗』）、宝永三年（一七〇六年）十一月、江戸山村座で上演したものがあつた。二代目団十郎も出演しているが、主役ではない。『役者評判記』には、景清を訴人にしようとする老母が彼に酒を勧めるが、景清がそれに気付き、三杯目の酒をこぼすという逸話がある。団十郎が景清を最初に演じたのは、享保十七年（一七三二）冬、江戸中村座の『大银杏栄景清』である。『江戸芝居年代記』には「市川団蔵癩病やみの景清にして、いてうの木のうちより顔出し所物すごく恐ろし」と記しており、景清は恐ろしい人物として扱われていることが知られる。

以上が、『役者評判記』などの文献から部分的に復元した筋である。元禄十五年の『実悪七兵衛景清』、享保十七年『大银杏栄景清』では、景清には恐ろしいイメージが付与さ

れており、それは、荒事は本来恐怖心を与える要素を内包しているからだ¹²と、黒石陽子氏は先行研究を踏まえて説明している¹³。

歌舞伎の世界において従来は恐怖のイメージを背負っていた景清であるが、『閨月仁景清』では、そこから大きく逸脱する趣向が案出された。どのようなものかを見てみよう。

『評判記』から読み取れた筋は以下のとおりである。

景清（初代市川団蔵）は張飛の姿をして、三河守範頼（仙国助五郎）の館に忍び込む。天下を奪うことをたくらむ範頼を懲らしめ、また、娘人丸の仇を討つ為でもある。管絃に紛れて奥へ進もうとする時、畠山重忠（二代目市川団十郎）は関羽の姿に扮し、景清と見あわす。

「大詰に景清唐人姿にて・のり頼くはげんの場へ忍び入時・重忠又くはんうと成てあらごと大当り」と『役者年徳棚』¹⁴（元文三年刊）に記録があることから、大詰は、張飛になって範頼の催す管絃の場へのりこんだ景清を、また関羽に扮している重忠が見破るといふ荒事が当たりをとりつたことがわかる。

ところで、先行作に頻繁に出てくる牢破り、観音の靈験、目をえぐったという場面が『評判記』には記録されていない。

その理由は、はじめから演出されていなかったためか、または観客に受けていなかったためであると考えられるが、実際にはわからない。ただし、『評判記』に記録されている上記の場面が観客に受けていたというのは事実であろう。この場面は、すでに黒石氏が指摘しているように、『壇浦兜軍記』で景清が大日坊を殺す話の後日談である。物乞いなり人足なりに変装した景清が重忠に見破られるという場面は幸若『景清』、近松『出世景清』などの作品には出てくる。しかし、この場面に重点的に趣向を凝らしているのはこの作品が初めてであり、これこそが従来の「景清物」とは異なる特徴ということになる。しかし、なんとと言っても、『閏月仁景清』の最大の特徴は、二代目が関羽や張飛といった中国の武人を景劇に融合させたことにある。これについて渡辺保氏は、「この趣向の本意は、前年の景清の癩病の暗さをにせ景清や中国の関羽張飛に結びつけることによって明るくし、景清のもつ人間像の悪の要素を中和させ、江戸根生の荒事と調和させたところにある」と指摘している。¹⁵つまり、関羽や張飛に変身させたことで景清における新たな形象を浮かび上がらせたのである。二代目団十郎は『三国志演義』の武將のイメージを荒事に融合させたのであり、関羽によって描き出される武勇の形象は、歌舞伎ではしばしば荒事として生かされている。

たとえば、この芝居に続いて、元文四年一月「太平記」を世界とする『瑞樹太平記』に出演した二代目団十郎は、再び関羽に扮していた。「我蜀の関羽と成べし・汝呂布と成て来るべしとてわかれ・大詰二坊門のさい将・呉の孫権となりの・大塔の宮ぎのそうく」と成て天王をせめる時・関羽と成てのあら事は、去々巳ノ霜月川原崎座にて・閏年二人かけ清に・此人ち、ぶの重忠役にて関羽となられし格なら・大はねく」と評判記『役者恵宝参』¹⁶（元文五年正月刊）にあるように、元文二年の成功を受けて関羽などの中国の武將を再び登場させるのである。

さらに、寛保二年九月一六日、大坂のお名残り狂言では、「東山」を世界とする『東山殿旭扇』に出演し、再び関羽に扮している。「本心（十六七才）を顕はしかゝる乱世の時・憶病者もあほうもなければならぬ・玄德并孔明が謀じやとのはね・上下万民喜びの肩を披きました・四番目唐土蜀関羽雲長の・掛地の抜画の姿と成・馬に乗大髭を掛ケ・大刀鎧を振まはし・ぶたいの働・終に山名久国并権太夫を亡し給ふ迄当りく」と評判記『役者和歌水』¹⁷（寛保三年正月刊）にあるように、関羽が髭をはやして、青龍刀を振り回し、赤兔馬にのるという典型的な特徴が取り入れられている。この芝居については、後の烏亭焉馬作『江戸容気団十郎鼻眞』（天明九年）に「もろこしの関羽もこれ程にはあるまい、日

本一の役者の開山、末世になる迄、大評判大当り」と書かれることになるほど有名なものであった。

これに続いて、寛保三年二月一日中村座『贋貢太平記』に出演し、そのなかに五関破りという趣向を取り入れている。団十郎は篠塚伊賀守に扮している。尊氏が勾当内侍とどの、兵衛の妹を青龍刀で殺そうとしている時、「暫」という文字が書かれている矢文が射かけられ、篠塚の出となる。吉例の『暫』の出端となり、篠塚は兩人を助けて青龍刀を貰い、義貞の供をして帰る。ここで青龍刀が使われていることに注意しておく必要がある。大詰は「篠塚五関破」で、大塔宮の熊野落の時、篠塚が次々と関所を打ち破って進んでいくという荒事の場面である。第三の鹿瀬の関では、大谷広次の尊氏が馬に乗って魏の曹操を名のって出るが、団十郎は「石兔馬に似たる紅梅くりげ」にまたがった関羽となって登場する。これは「大々当り」（『役者子住算』）であった。青龍刀、五関破り、これらはともに関羽と深く結びついた事物と故事である。¹⁸

二代目団十郎が『三国志演義』の人物にこだわっているのは理由がある。二代目の「日記抄」¹⁹には「享保一九年九月二十三日、万ヤ清兵衛ヨリ三国志借ル」また「十月七日、習魚丈ヨリ三国志帰ル、又通俗三国志カス」とあることから、二代目団十郎は『通俗三国志』を好んでいたことが知られる。

また、寛保二年二十一日の日記には、「唐黍の髻に香ほれや菊の花 右は関羽の絵の礼也 きのおふ二十日新任のおてう酔て寄らる 暁雨丈たのみ奉納発句 たんさく」とあり、『栢庭狂句集』拾遺²⁰に「関羽の絵 ほとゝぎず月をめあての雲なかし、鏡見て髪ゆふ海士や五月雨」とあることから、二代目団十郎が関羽を描いた画を実際に目にしていたようである。

二代目団十郎は、初代市川団十郎の荒事を継承しつつも、自分の芸を拡張しようとしていた。たとえば、『国性爺合戦』浄瑠璃の主人公を自ら演じていたなどのように、つねに荒事に新しい要素を加えていくのである。二代目が青龍刀、五関破り等の場面をしばしば使うことも、関羽のイメージを市川家の荒事に加えようとする意図があると推測される。そして、関羽をしばしば登場させたのも、関羽の武勇のさまと、市川家の荒事のあいだに、共通する要素を見いだしていたからである。

今の段階では、それまでの荒事と関羽が登場した荒事との相違をまだ明らかにしえていない。今後は、「景清物」のほかに、関羽が登場している『瑞樹太平記』『東山殿旭扇』などの芝居をも取り上げて、「太平記世界」「東山世界」などの先行作品と比較し、その相違を明らかにし、それによって二代目団十郎が関羽に扮した意味を見出したい。それを検証することによって二代目が、荒事にどのような新たな要素を加

えたかが明らかにになると予想される。

2) 関羽信仰

二代目団十郎は関羽の武勇という側面を市川家の荒事に融合させていたのに対して、時代が下るにしたがって、霊になった関羽というモチーフがさかんに使われるようになった。安永八年（一七七九）十一月、江戸、市村座顔見世狂言「吾嬬森栄楠」に関羽の霊像が出てくる。これは新田義貞の狂言であるが、勝川春英が画いた絵本番付が残っており、大詰の、関羽霊像の場では、関羽（九代目市村羽左衛門）、張飛（二代中島三甫右衛門）、孔明（尾上菊五郎）、長浜左衛門（四代目松本幸四郎）等が描かれている。「役者紫郎鼠」（安永九年正月版）羽左衛門條には「大詰に関羽の霊像などはきつい栢蕙では御座りませぬか」とある。²¹ また、嵐雛助は寛政元年（一七八九）正月、「けいせい北国曙」で関羽の霊像に、そして、寛政二年（一七九〇）九月、「北国曙」においても関羽の霊像に扮していた。このように、歌舞伎への関羽（関帝）信仰の影響は大きい。

関羽信仰は日本では一般的なものではないが、享保十年に『関帝靈籤御大全』が刊行されたことをみると、関羽信仰が知られていたことは確かであろう。また、宝暦・明和・安永年間の川柳でも、関羽が仏教の守護神だという意味のことを

詠む句がしばしば見られる。「門番にどぶつと髭はひざを組」（宝十一・智2）、「中身世の関羽ハねづミ衣で居、せわな事かな」（明元・叶3）、「びぜんこうはらつふくれととなり同士」（安四・義4）、「門番にしてはうんてう過きたもの」（安六・松11）などの川柳は、江戸の羅漢寺（天恩山五百大阿羅漢禪寺）の中門、天主殿に布袋和尚と関羽の像が安置されていたことに基づく。

ところで、時代が下って、文化八年（一八一二）三月の中村座で、三代目中村歌右衛門が出した七変化、『遅桜手爾葉七文字』が披露された。このことは『役者出情晰』という評判記に出ており、歌右衛門は、城の衣装を引き抜いて座頭に、弁慶の衣装を引き抜いて海士に早替りして見せたという。この七変化上演に対して、坂東三津五郎が、三月六日から、市村座で、二番目の大切として『七枚続花の姿絵』（女三の宮・源太・塩波・猿廻し・願人坊主・老女・関羽）という七変化を出したと伝えられる。歌右衛門が「鍾馗」に扮するのに対して、三津五郎が「関羽」に扮するという競演であった。「関羽」の対となるものとして「鍾馗」が取り上げられるのだが、鍾馗も関羽も伏魔神として捉えられている。『画譚鶏肋』（安永四年序）に「関羽の像、唐山にては鎮護とす。関帝菩薩、又は伏魔大帝など称せり。劇にも三国志の事を多く用ひて、関羽、張飛等は、曾我十郎五郎を江戸の兒女まで

しれるごとくなりとぞ」という記載がある。また、黄表紙『通俗三国志』（刊年不明）の最終丁でも

唐土にては此関羽の像を絵がきて、門戸にはれば、悪鬼おそれ小児のおびえるもとまるとかや申、日本にてもちゆるしやうき大臣共い、つべき悪魔がうぶくのぎやうごうなり。されば、禪家にては仏法守護の神とまつりて護法関帝と称するなり。およそもろこし第一の英雄とよばれしは此雲長の攻なり。

『三国志演義』では、関羽が悪魔を退治する神としては扱われていないので、このような認識は『三国志演義』というテクストを通じての受容ではなく、ほかのルート、つまり宗教のレベルで伝わってきたと考えられる。たとえば、明末清初の動乱を避けた文人や黄檗僧の来航とともに齋されてきた書物や絵画を通して広まった関羽像である可能性が高い。

三、結び

以上、歌舞伎の世界における関羽像の受容を概観してきた。『三国志演義』の関羽像が、歌舞伎の作中人物たる関羽にもれなく反映されている訳ではない。関羽の「義」に厚い性格や欠点が前景化されることはない。一方、関羽の外見やその

武勇は大いに活用されている。それと同時に、鍾馗と似たような性質の神と見なされていることも興味深い。

今回は紙幅の関係で、『通俗三国志』の介在を問題にしなかったが、今後は、『通俗三国志』をも考慮に入れて、歌舞伎作品が関羽像を受容することによって、何を獲得したかをより一層掘り下げて明らかにしたい。

注

- 1 袁宙宗「論関羽の気度与才徳」（『中華文化復興月刊』一七卷二期、一九八四年）
- 2 朱偉明「関羽形象的悲劇美初探」（『武漢師範学院学报』一九八三年二期）
- 3 白盾「論関羽形象的塑造及其“神化”——『三国志演義』礼記」（『安徽師大学報』一九八七年一期）
- 4 唐華「三国时的関羽与三国演義中的関公」（『明道文艺』二二六期、一九九四年）
- 5 涂大为「台湾寺廟中関公造形之探討」（中国語文化大学芸術研究所美術組修士論文、一九九六年）四〇頁。
- 6 「尙玄德已棄世、公何所歸乎？」（二十五回、三民版、一五八頁）
- 7 「願從於地下。」（二十五回、三民版、一五八頁）
- 8 陳昭昭「從戲曲小説看関公形象」（輔仁大学修士論文、一九八六年、第四章、二二三～二二五頁）

- 5 「如不勝、請斬某頭」
- 6 「操教醜熱酒一盃、与関公飲了上馬。関公曰…『酒且斟下、某去便來。』出帳提刀、飛身上馬。衆諸侯聽得関外鼓大振、喊声大举、如天摧地塌、岳撼山崩、衆皆失驚。正欲探聽、鸞鈴響处、馬到中軍、雲長提華雄之頭、擲於地上、其酒尚温。」(第五回、三民版、三〇頁)
- 7 「還我頭來！」
- 8 「我乃漢寿亭侯関雲長也！」
- 9 井上以爲智「関羽祠廟の由来並に變遷」(一)(二)『史林』第二六卷第一号、第二号)では、関羽を祭る廟は唐代からすでにあったと指摘されている。
- 10 涂大爲氏前掲論文。
- 11 歌舞伎の「景清物」については、台本が残っていないため、断片的にしか窺い知ることができないことを断っておく。
- 12 今尾哲也「荒事芸の成立」『変身の思想』(法政大学出版社、一九七〇年)
- 13 黒石陽子「二代目市川団十郎の悪七兵衛景清」(『歌舞伎 研究と批評』十一、一九九三年)
- 14 役者評判記研究会編『歌舞伎評判記集成第二期第一卷』(岩波書店、一九八七年)
- 15 渡辺保「四代目市川団十郎」(筑摩書房、一九九四年)
- 16 役者評判記研究会編『歌舞伎評判記集成第二期第一卷』(岩波書店、一九八七年)
- 17 役者評判記研究会編『歌舞伎評判記集成第二期第二卷』(岩波書店、一九八八年)
- 18 この芝居については、黒石陽子氏は「元文二年に演じた時の単調な取り上げ方に比べると、関羽に関する著名なエピソードや、イメージを立体的に狂言の中に組み込んでいる」と指摘している。(黒石陽子「草双紙と通俗軍談物の諸相」小池正胤・叢の会編著「黒本・青本の研究と用語索引」国書刊行会、一九九二年)立教大学近世文学研究会編『資料集成二世市川団十郎』(和泉書房、一九八八年)所収。
- 19 前掲『資料集成二世市川団十郎』所収。
- 20 『守随憲治著作集』別巻(笠間書院)に番付についての解説がある。
- 21 『日本随筆大成一期四』(吉川弘文館、一九七五年)所収。
- 22 長尾直茂「江戸時代の絵画における関羽像の確立」(『漢文学解釈と研究』二巻、一九九九年一月)